

獲る定置網から留め置く定置網へ (緩やかな移行への提案) 2/2

- ・生産に関わる主な費用は、固定費：人件費、船舶・漁具の原価償却、燃料費（漁獲量に比例しない）、変動費：氷代、箱代となり得る。原材料費＝0、固定費>>変動費。
 - ・魚価は生産量が増えると低下する。その逆もあり得るが、需要が少ない魚種については生産量に関わらず、安価で安定している。その一方、需要が多い魚種については、ある程度までは消費者は高価に追随してくれるが、限度を超えた価格ではそっぽを向く。景気が良くない現状においては、その限度が低下している事実もある。では、全てが低価であれば良いかといえば、一概にそうとも言えない。高価な魚種、同種の中の高付加価値品であっても少なからず需要はある。低価×多数量＋高価×少数量が最大額となる。
 - ・さらにその最大額を増やす要素は需要とのマッチング向上となる。とある鮮魚店長にこっそり聞いたところ、店頭の半分売ればなんとかなるとのこと。逆に言えば半分近くがロスとなっている。店にとっては利益の損失だけでなく原価の損失でもある。
 - ・したがって、在庫の効かない鮮魚介類については生産地で在庫を持つことが合理的であり、プッシュ型からプル型への転換が求められ、売れる確率を高めることが求められている。そして、生産者と消費者の距離を縮め、消費者のその日のニーズに合っただけの量を生産（出荷）し、消費者～生産者までの利益の最大化（全体最適）を目指す。
 - ・消費者に対して「今日出荷可能の見える化」を実施し、また「食べず嫌い」や「知らず嫌い」の撲滅を図り、若年層への呼びかけに活用する。消費者の高額なものが「オイシイ」の風評を一掃し、生産者にも「オイシイ」から本来の「美味しい」を啓蒙する。
- ◇定置網 その利用形態における発想の転換（提案）
- ・定置網は前回「空振り」で紹介したように、その確度は自然に委ねる待つ漁法であることから低い。入って来たものが漁獲となる。一方巻き網は積極的に取りに行く漁法であり人為的要素が高い攻めの漁法である。定置網は時化で数日近づけない日があっても、中の漁獲は活で保持されている（キープアライブ）し、在庫として有効である。一方巻き網は時化の日は漁獲ゼロである。気象予報の精度は近年その精度が向上し、時化で出漁できない日は概ね予測可能となっている。その日数分の需要量を活で取り出し易い場所に保管することにより、時化の機会損失を免れることは可能である。巻き網の漁獲（網のままもしくはある程度絞って）も定置網として漁港の傍に留め置くことを提案し、水揚高から手数料化への発想の転換とその安定化を図る。そしてその評価の基準を主に充足率と量とすれば不公平感も少ない。魚価を気にせず、努力した分だけその対価として安定的に支払われる仕組みを提案する。まずは全体の10%を目標に、大きな効果が期待できる。